

言語文化（古文・漢文）

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

葉月二十日あまり、のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石浜の庵いはいに行きてやどりぬ。^a 有明の月のにほひも、霧たちわたる暁のさまも、所がら世に似ぬものから、ここは雨のそほ降る日なむことにあはれは深かりける。もとより萱茸かやふける庵なれば、音だになくて、軒の雫しづくの三つ四つ落ちそむるより、籬まがきの萩の下葉色したばづきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水の面は動くともなくて、鏡のごとくなるに、雲の濃き薄き移ろひて、かつ浮かびかつ消ゆる水沫みなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈をの一筋は、さし引く潮にもまじらで、永久とほにはなだの色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上みなかみの秩父の山の真清水ましみづの落ち来るならむ。^e

うち向かふ岸の榛原はりはらのみ、濃き墨書きのごとくなるが中に、柞はその黄ばみたるは、^④さすがにほのかに見えて、そのひまひまより長き堤の見えわたるに、堤の彼方をちなる梢こすあはやうやうに薄墨もてかき消ちたらむごとく、いとしもはるけきはただなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。^f ここかしこより鳥からすの飛び行きつつ、ねぐらの鷺さぎのつばさ重げに起き出でて、河の瀬の真菰まこもに下り立てば、鶚みこしの群れ来て、水の面に浮かべるもをかし。^h 上つ瀬より筏師いかだしの蓑笠みのかさ着て棹さやを筏の上に横たへ、おのれたむだきて思ふことなげにてをり。筏は水のまにまに流れゆくもしづけし。渡守わたしもり、舟さし出だせば、大笠傾けて渡りゆく人の、やがて堤をあるくさまも絵によく似たり。ⁱ

すべて一日ひとひの中に、筑波嶺つくばねより吹き下ろすかと思へば、沖よりも風通ひ来て、岸の木立も長き堤も、あるは現れあるは隠れて、限りなき青海原に向かひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてやや夕暮れ近くなりゆけば、群鳥⑥のおのがじしねぐら求むるに、雁かりの一つら二つら渡りゆくなど、^⑦えもいはむかたなし。暮れはてても、なほ行く水の色のみ遠白く残りて、川添をだひ小田いに斎いはへる水分みくまりの神の御灯みあかしの、海人あまの漁いさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。^j

□ ふけて小雨そほ降る隅田川^⑧たが墨書きのすさびなるらむ

(加藤千蔭『うけらが花』による)

(注1) はなだの色Ⅱ薄い藍色。

(注2) たむだきⅡたむだく。腕組みをする。

問一 二重傍線 a ~ j の語について、用言は活用の種類(動詞は活用も行も)と活用形を、助動詞は意味と活用形を、それぞれ書きなさい。(例) をとこ あり けり。 ありⅡラ行変格活用 ー連用形 けりⅡ過去 ー終止形

問二 傍線①「にほひ」③「しるかりけれ」⑥「おのがじし」⑦「えもいはむかたなし」の意味をそれぞれ書きなさい。

問三 傍線②「こと」を漢字で書きなさい。

問四 傍線④「さすがにほのかに見えて」⑤「いとしもはるけきは」⑧「たが墨書きのすさびなるらむ」の解釈として最も適当な

ものをそれぞれ次の中から選び、その番号を書きなさい。

④「さすがにほのかに見えて」

- 1 薄くても色があるので、やはりほんのり色づいて見えて
- 2 暗くても雨に濡れているので、やはりかすかに光って見えて
- 3 少なくとも色鮮やかなので、やはりわずかに散り残った葉が見えて
- 4 遠くても一面に生えているので、やはりほんやりかすんで見えて

⑤「いとしもはるけきは」

- 1 ずっと遠くにある木は
- 2 たいそう下流の方では
- 3 ちよつと高い堤防には
- 4 やや時間が経った後は

⑧「たが墨書きのすさびなるらむ」

- 1 だれかが墨絵をうまく描けずに放り出したようだ
- 2 だれが筆にまかせて気晴らしに描いた墨絵なのだろうか
- 3 田んぼは墨絵のように荒れはててしまっているのだろう
- 4 田園にともる灯火が墨絵に彩りを添えているようだ

問五

□に入る最も適当な季節を漢字一字で書きなさい。

問六　ここに描かれた風景から伝わってくる印象として最も適当な形容詞を、本文中から抜き出して書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。

南方^ニ多^シ没^①人^一。日^ニ与^レ水居^ル也、七歳^{ニシテ}而能^ク涉^②、十歳^{ニシテ}而能^ク浮^{カビ}、十五^{ニシテ}

而能^ク没^ス矣。夫^レ没^{スル}者豈^ニ苟^③然^{ゼンナラン}哉。必^②将^レ有^下得^ニ於^一水之道^一者^上。日^ニ与^レ

水居^{レバ}、則^チ十五^{ニシテ}而得^ウ其^ノ道^ヲ。生^{マレナガラニシテ}不^レ識^ラ水^ヲ、則^チ雖^モ壯^④、見^テ舟^ヲ而畏^ル之^ヲ。

故^ニ北方^一之勇者、問^{ヒテ}於^ニ没^一人^ニ而求^メ其^ノ所^ニ以^ヲ没^{スル}、以^テ其^ノ言^ヲ一試^{ミルニ}之^ヲ。河^ニ、

未^ダ有^ラ不^レ溺^レ者^一也。故^ニ凡^ソ不^{シテ}学^バ而務^{ムルハ}求^{ムルニ}道^ヲ、皆北方^一之学^ブ没^ヲ者也。

昔者以^テ声^⑤律^ヲ一取^ル士^ヲ。士^ハ雑学^{シテ}而志^サ於^ニ道^一。今也^ニ以^テ經^⑥術^ヲ一取^ル士^ヲ。

士^ハ知^{リテ}求^{ムルヲ} X 而^レ不^レ務^メ Y。

（『經進東坡文集事略』による）

(注1) 没人Ⅱ水に潜る人。

(注2) 涉Ⅱ川を徒歩でわたること。

(注3) 苟然Ⅱいい加減なさま。

(注4) 壮Ⅱ壮年。三十歳前後の男。

(注5) 声律Ⅱ詩賦が韻律になつてゐること。

(注6) 経術Ⅱ聖人の教えを記した経書を研究する学問。

問一 二重傍線 a 「与」 b 「雖」 c 「所以」の読み方をひらがなで書きなさい。(現代仮名遣いでもよい。送り仮名は不要。)

問二 傍線①「夫没者豈苟然哉」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 あの潜る人は、なんといい加減なのだろうか
- 2 あの潜る人は、そんないい加減なことを許すだろうか
- 3 そもそも、潜るといふことは、どうしていい加減でできるだろうか
- 4 そもそも、潜るといふことは、いい加減でできないことがあるだろうか

問三 傍線②「必將^レ有^下得^ニ於^上水之道者」の読み方として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 かならずしもいまだみづのみちにうるものあらず
- 2 かならずしもよろしくみづのみちにうるものあるべし
- 3 かならずまさにみづのみちにおいてうるものあるべし
- 4 かならずまさにみづのみちにうるものあらんとす

問四 傍線③「之」が指すものとして最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 潜る意味
- 2 潜る時間
- 3 潜る方法
- 4 潜る理由

問五 傍線④「未^レ有^ニ不^レ溺者」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 いままで溺れなかった者はない
- 2 きつと泳げるようになるだろう
- 3 どうして溺れることがあるうか
- 4 みんな自由に泳ぐことができた

問六 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 北方の人も、南方の人の言葉に耳を傾ければ、必ず潜れるようになるのだ。
- 2 道の習得は、後天的な学習によるものよりも、先天的な資質に左右される。
- 3 潜るという技術は、南北を問わず、本来は誰もがができるものなのだ。
- 4 潜れるようになるためには、日々の学習と努力によって体得することが大事だ。

問七 ☐XYに入る語の組合せとして最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

1	X	学 _フ	道 _ニ
2	X	水 _ヲ	没 _ニ
3	X	道 _ヲ	学 _フ
4	X	没 _ヲ	水 _ニ

問八 本文の著者蘇軾^{そしやく}は、北宋の文人官僚で、唐宋八大家の一人です。蘇軾と同時代に活躍した唐宋八大家の人物を次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 王安石
- 2 杜甫
- 3 白居易
- 4 李白